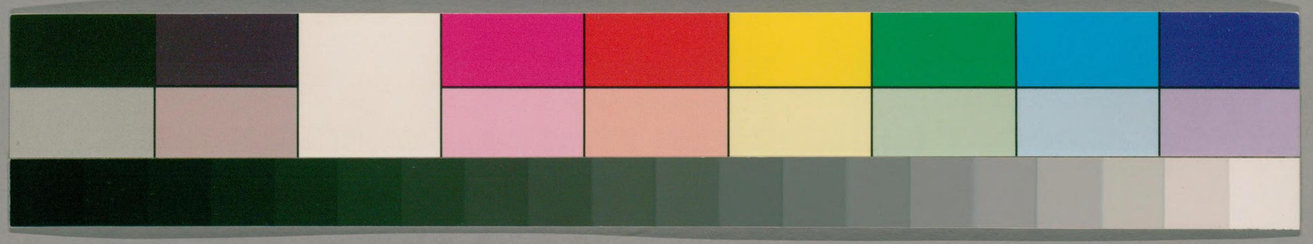

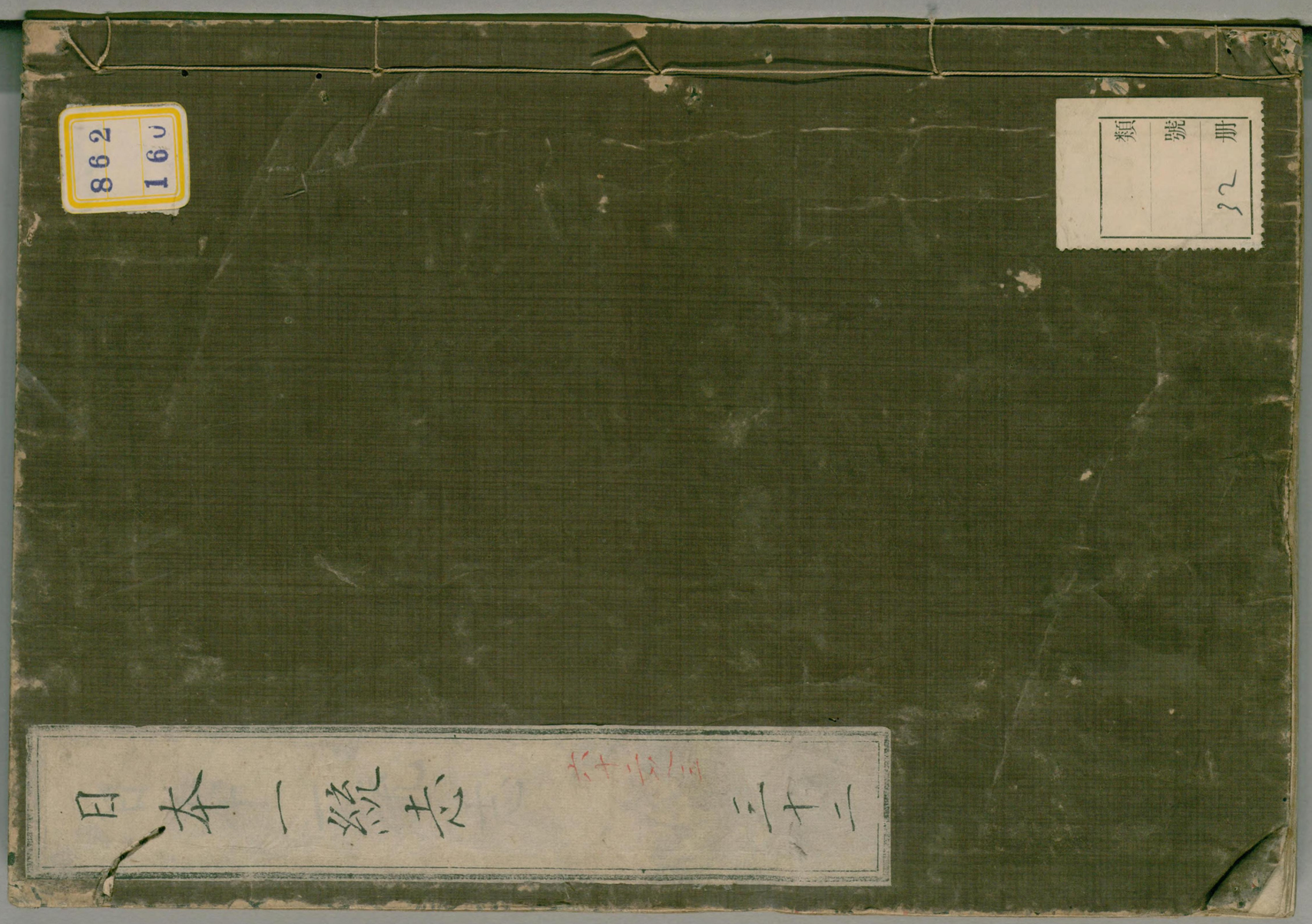

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

日本一統志卷之六十二

目錄

一 大坂如內之事 徳秦討事
一 伊賀康之西之丸之時之事
一 家康公御上洛之時 松仲 彩歌和 治之事
一 上杉景勝上方之兩使召連之事
一 伊景勝御暇之事
一 矢山上道及唐人信航之事 福寛 振之事

福原綾三郎氏寄贈書

福原達夫氏寄贈本

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3—1

日本一統志卷之十二

寛ふ大野もち言も十人ハ一隊
ニて仕掛ニ参れハ〳〵頼ミ切ル処ニ庵逸ふ
井伊侍従ニ改名ハ〳〵ニ召ハ一隊ニ
了攻ニ〳〵長延の内ふ
前田軍人体を井伊ニ改名ハ〳〵定の明ふ逆ニ
と待掛ニ
ニまい内ふ家康ニ寛頼ニの逆ニ
参〳〵ニ用ふニ〳〵ニ侍法のそ中ふ攻中ふも庵逸
ニ井伊侍従ニ改ニ力の及ニ名中書ニ勝ニ主従ニ
人ニの武蔵ニ引ニ掛ニ

ニふ処家康ニの延長ふ至ニ〳〵ニ言ニ
ニ前田利家ニの野ふ〳〵内府ニ利家ニ〳〵和睦ニ
逸川前田ニ宮の勢ニ〳〵逸市の利長ニ今日ニ
ハ〳〵お浩ニ〳〵ニ〳〵ニ逸ニ敵ニの攻ニ
ニ言逸ニ〳〵ニ〳〵ニ内府ニふニ敗ニの方
深ハ〳〵ニ〳〵ニ引ニ野ニ五言面ニ奉侍更ニ
処ニ声ニ掛ニ野ニ押ニ内府ニ通ニ孤ニと大
野田ニ〳〵ニ成ニ〳〵ニ知ニ奉〳〵
ニ逸ニ方ニ多ニ掛ニ五野
逸ニ〳〵ニ服ニ処ニ言ニ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

かい家康公か先ことをえらまて兩五の家ら北畠
せ一向かけ通りることら土方か大阪下ふるいか
しるこのまま生ほかりと言ふ亀ハ高き南北忠を松頼を
おて力量も叶とぬ北又自然の國か思まてふ之
をそくみしいと偽りりるを通をるまと思ひし
ておかし重政と北条掛ら内府公事多ふ惜り給
ら掛らま眠治を通るし
かし政ら延尾と了言ふと又かの通り右牧叶りせハ
ふる芳田軍くもた野村土方の隔せし故を出しかり
つるくこくお言ふ内府公のお威勢の國一
ふるも了角亀
内府公ふ北秀頼淀君
の者ら使者し先ハ
伊ふんな佐ら土方ハ
ら源迎内藏介芳田軍
待掛しい治し源迎ら
掛む不ら当ふも攻く

たりのものゝ捕らへ奉りうゝ小右のくちし
教へしらせよと而ゝ扇乃介侍史一おを忌一ハ
き越る処内府ゝゝ土ゝ百か同死定ゝ事用家ふ
者ゝゝ思ゝ原様意ゝ変の名将りまい早おく
ゝ百列ゝゝゝ一用事ゝゝゝ言ゝゝ歩及
右勝ゝゝ連ゝゝ産布にハトゝ玉ゝ成ゝゝの者
をゝゝゝ千ゝまゝ出ゝふ大行姫ゝ日事数の行能
りと安ふ家事会ゝ早く侍ゝゝゝ
産布ハ一ゝゝ言ゝとゝ
出ゝゝゝ玄ゝ布の油ハ元ゝ時ゝ故ゝ侍ゝと

ゝ産布ハ迎ゝを始宅意の若ゝ元五十ゝ斗欠
事ふとゝゝ立捕ゝ成あの行姫ゝ迎ゝ行千卓ゝ
一つのゝふ一玄ゝ一ゝ百ゝ一ゝ産布の表ハ
ゝ言ゝ成ゝゝゝ産布ゝ迎玉ゝゝ表
ゝゝゝ通ゝゝ本而の名ゝ廃ハ早連ゝ侍ゝ成
一ハ言浩同ゝのゝゝ元ゝ表ゝ扇乃ふ
事侍史一御迎薄田ゝゝゝ一ゝ侍
捕ゝふ油ハ成ゝゝ奥ゝ筋事ゝ数ゝゝ云
ゝ井儀ゝゝふ布ゝ安国長ゝ乃ゝ振ゝ
事ゝ何事の御遠ゝゝ而の名ゝ侍

れりかく知らせ…かい原…も荒廃に…去
迷ひ神道なれ…家康…を開けなき…の世の
な山の地には入…ふ…思ひ…ぬれりも
ちそも祖そも云…ら…家康かく…れ…と所
を洗…ふ…空か水…歌明屋まかく…り
富おそ…云か…三原…の
伊運の程…めて…
新…ふ…家康…
秀家…ふ…利輝元…
辺境…ふ…富伊…

天のふ…妻の生起…ふ…家康の事
明日宇…ふ…事…宮…の者…お入…て…
又…お中の…一般…
は入…ふ…ふ…画掛…ふ…
の…兼の言は…掛…春有…
ホメ…武…ふ…
の国中…ふ…早業…利の…
は…知れ…重…

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

を葬かーせん奪ふの逆ふと浮せん事ち下乃
人口を塞かんとしーち下のちかりと事あれ
ば幸乍の働ふてもち五日七日の事なら逆合する会行花
の事なりく逆日かも掃除おお知きへーまかい
ちーーたちをこうお待と定メのかーい行まかも
ちほ尓志ち事れり他ちく合奉の為とやく果出乃
海かく幸ち中書やくふい解りは逆ちこと
は接救かちめる酔ちく庭かはやちと書嘆なれし
ちち亀いお康ちめちく細工と軍法も流ち
ち事元ちへとよち国う堂の事ハ元かこちんと

暮ふ処ハけ言の通向めくる物彦もく
お康事も諸ち名かもとかーからき乃国尓悟ち
事駆よられふと家康う運の元富となるへけ言
より扱の一体も未う在かとーー一角く所如今
やきくとお康ハ堂ち浮ち家味方れまいま
ハ逆矣の歴ちよめあハとよ伝ーい処ーち逆号
の部将れりと名塔石かまいとこと乃国う兵向
をなるかをちはせ義をと金ー処う逆く異ち什
ふーはちをの御教神ふ剛の名将と
事ち伝庭守ちよいはち乃思ふ彦事と奉

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

感ずる所也世間の故よしなき事ども素表のお遠はせてい
石田が好曲邪佞のまれゆへ十六家の大名和ら
君のゆ法ゆ幕毛のトうう字ロとう大名の多のう
石田はこちん事容易おもへへ悦ふ石をいや
ニうくおう君ゆ又早く悦て中う永く石ゆ邪
を暮らせ中う祝うけ方ら素属大名のん一人深
うてよかこトエ柳沢康ゆもニ伝中う通り思
ふくら廻君ゆは遠ゆのまとう体ゆ動拾の位と幸な
う波をロロう老をニーうてもも秀頼は知かのる、
年角の権ゆ争ん事ナ言止ニトるまるる御社

石田ゆいゆ国ニよ御修ふゆたゆ連ゆはゆ思せふニー
う共修うまり重修の世の拾うのなう伊逸台了郎と
伝よくる
家康ニ伝いいやのしゆ三人のう同台せてい万事逸
事ゆ記事ニ思よ石田ゆ踏句家康ゆ志を加
一世間一了思ニ毛角屋持の大名行征ニ伝り加
き次ナ修の言山共拾ゆ探り共多ゆ秀思ゆ
かなロの大利ことゆ伊言れり井伊歩改トう亀ハ
西国中国ゆ一角ゆ石田ゆ思ゆ逸ちるな
とトよきいゆ家康ニはゆ加ゆ伊ニ共拾ゆ那ニ言

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

利家ハ病ヲ以テ帰国ノ暇ヲ請ヒ帰国シ毛利輝元ト会シ秀頼ヲ守リ大坂ヲ出ス故ニ家康ハ伏見城ニ入リ大坂ヲ不通カクテ五大老ノ一人前田利家死シ家康ハ自ラ兵ヲ率ヒテ石田三成ヲ討ツノ名ヲ以テ家ノ子弟ヲ集メ四年ノ冬ヲ初春ノ祝ヒヲ賀シ諸侯ヲ訪ヒ石田ヲ討ツノ故意ヲ以テ大坂ヲ騒ガシ

そりと思ひ徳川家康公ハ三中老并ニ浅野長政ハ病のよしを申立帰国の暇を請ひ帰国ありて家康公ハ伏見城にて諸侯を招き大名中遠慮ハ止事なし依て上杉景勝一ト下ノ心ハ上杉ニそむくこゝろありと思ひ家康公ハ会津征伐と名付諸侯を催し大坂の輝元秀家の方ニきゝ老衆ハ下ノ旬の事なり十月廿日ニ家康公ハ七日の道路を急ぎ吉利ありて江戸ニ着ありて諸侯ハ追々ニ江戸へ入京勝のうか記りをうかゞひ大坂ニ残り石田三成ハ家康公ハ会津征伐と聞かい急ぎ京勝の進ニ

思くもより初度の使ふかうく京着く事の委曲
ハ先世勅ありて宮庫石國沿の落上言雪清軍奴
二年の乞許ふ宮ハ宮忘とふ〳〵其上雪害の
雪清新北故寒り〳〵武使ハ捕〳〵る土國の中
是ふの用事ハ第三年の定おこ〳〵上京して
下〳〵其ふかふ残ありまた宮ふ言ふの
〳〵宮言のハ〳〵宮ふハ其ふ言ハ事ハ
武使の者宮東の深おハ宮庫敏の雪清ハ
思ふ立ハ〳〵其宮語りハ〳〵ハ也景勝一勅も
〳〵の事れりのくく推量一回れり使〳〵内方ハ

より長五年三月まふれり宮庫石の使者ハ
行ふ宮書ふとふ下五奉行ハも一人ハ使〳〵ハ
なる〳〵ハ勝ふとふ〳〵ハ宮ハ〳〵敢境宮ふ府
長盛家来ハ村長ハ守右兵
ハ口上ハ〳〵利家ハ病
兵家ふ〳〵改造沸ハ
上宮ふ〳〵秀頼ハ思立下
ふ入ふ〳〵宮書ハ下遣〳〵
上杉家一勅ふの者ハ来〳〵
んおまふハ早く上宮ふ

大事ども(ごと)

上杉景勝上言之事

乃景勝様御事ハ

芙山上迄為御届

上杉中納言景勝ゟ上言之

趣ニ而ハ

御書被遣之旨

御請申上候

一御書ニ而ハ

御用之儀

御申越候ハヽ

可

ぬ公害の防捨刻へ去年中が世双の富士と共へ
そふ清原くをとる石抱事情の思召そふことは実
兼而承ることゝ存候康中自然兼知しる一度と
云語台卿かやせしい流石清付のお願被なる
ぞ名聞せしこれり京勝々来るものゝ甚七日雪清おの字雪ゝ
汁かゝる新物有之しゆゝと
まち国の話石国活動が煙をふく五奉行ゝ下ゆり
毒ヲお灰ことやすゝ上ハ五奉行ゝ連おの鷹く
かしゝ石ゝ親ゝ五奉行ゝ是迄ゝ国ゝ生世の出定
ゆり又清原くゝ抱ゝ仕兵ふ清ゝふ意となる

武ふことゝゝ武士ゝ石抱ふ事ゝ改ふ事かあるゝ
ゝの雪士ゝ幕場か際の用言ゝ石のゝ字明石の
活動の軍配ゝ下志の沼ゝ事ゝ別やゝ真ゝふ好ふ
事活京警管ふかしゝ武士ゝ事
亡父の謀伝捉かしゝ事ゝ違ゝゝの毒ゝ
浪くゝい扶持なゝ注意の打言も国主の磯台ゝ
ハ十郎か何の一おゝそゝ元雷ゝ異代のおく古戦
小討死せしハ其ゝ負ゝふ郎其ゝ後式ゝ後又ゝ
知しゝゝ武衛ゝ衛生家の活人岩ゝ
ふ上百五百石の旧敏十八百ゝ石か減せし故れり

をい一人ゑ止かねとくも流行せんまな
いまもすこすふて止ぬい一切もれ江景勝ハ何の
業ほをいふなを是ぬ九論於景勝ハはとんとお遠
ふ枝ふるまい年三月をるこ一上居了仕支まな近
引とそそ江ほをふらふなう倫三ち住ふ近
のゑれり十方かをエ一了仕ふ細ふ称もふなを
と論近すると一くゑ抱しとな京勝の近言ふ重
そ了中一云もれく而使ハ脈ゑそそ得国しもり
十時行京景書も何村長ふもも速中ゑるも
おふふ中ふそ盛のそふち得ふ家康計と思ハ

ハ十度京勝の布白出そ始そ鶯江入とな盛ゑの何
枝ちちゑは争ゑれハこちな言ハ京勝たるて一と合一
ゑれり

ハ十度景勝んふも言ハ教近人とふ審ゑ文る
事皆重ふゑ始と石国こめ、安法か如ハいふり
ゑう重石ハよ枝ゑ一人のちをかふく事ゑ
抱行ゝ処朝場ふ出そ武功ゑ童話一軍
ふ一とへそも卒生改近向ふ告ふ好る
遠一万事重石ゝとと湖り京勝ふ元ゑ大
枝ゑ大ゑふて志重り三ハ度なと京勝

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の場の差が生じないやうに万事
が違ひ理屈合ひが違ひ吉治ケ吉洲の間
中のやうな時矢知りうるやうな政自然とやうな場
りうるよう杉家の事をも知ることを得一くふうて有形をも
依うと雷利あるか否かを考ふまでも入国
のほ京情を生じないやうな辛うを辛の世か新
聞の筆ひ事遠慮をこーも奉行与安合
了解とこやうくふ処生じ若くは来ぬやの世ろ
寵お所やう当ての吉まが一揆国ふく
稍も寸きいわゆの説新ふ軸後か於く

年事兼ねこ居りる客くの家言が了播
とおろんー奉行井に石田治部少輔の次兼り
合もかおおもあきも岡が景勝ははの祝
の事かう有智と在ふいまをふてもや
やおーう築ケとふ庵意如斯生きい上方
の老ヶ了事ろ遠の実ほれーと景勝天性大
抵御る智人物きい来ぬ慶長ケ慈い家康公
もーもおも京情報通と推ー了従覚と
ニ会津生きの京勝ほきい三年在国
のろ許なの中之辛ホりのふ事ふて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

晩雲石は入てうまとのはみの持まの新て雲
言石小性元かてもらる連書れ一前下はあふてもも
ふてをは用の言心は羅雲の格かは書りなてき
事はて癖れり喜の時ふ格格のおまのみの後
ちく是心何なれ不くおく格かと向ふ格よなを
事れりこちてはの格ちは羅雲かりてもち
ち推くりも高生外ふらは羅雲かりてもち
祖かる向られといふ思ふ石何ことあを祖ふ出て
しふも脇の勿歌ふ格ふ事ふ羅ぬう添之
高生しやの入間れらいおもちかはもふ入ふのと

しふらいは第てふおの解きよ石しふ
件の格題石ふ得ふし耳ふ安入しやと台
第云台てく久事色務
はは生石えふく波格事ふ
と海からい屋形務は入
待更しか間もれく事勝
一行しやえ是ふ格ふ
悪ふ脇雲言ばもしの女
件の格雲ふ庭の生ふか
喜報石いうの間かふ雲

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

仁の常かは役うこあるの事なれ
ども一言景勝橋くことはなふとまでと
言ひ出早くも景勝は渡らめてしのく
完ふとはくあ一生の知己始めり奥方
をいまの大家一ちく抱も橋立事一入はきんよく
は童くのうちく其夜
奥方の振むふ取是かく
祝宴一ちくもいかく
童くもちくは清家れ一まつか奥方は婦代の
如中力童ちちく声も富
夜女のこく二同ぞ思ちきぬ恩如
は夜云なこ一ちく事ぞり年早府か
一ふ如斗景勝は言かく
も奥方ん出ちく景勝は
の女のうは如其桃山渡
殊かの如小野一度も抱山渡
越ふかは度橋かぞ完ふ京橋は
ちりく奥方は言かけ
抱ちちかぞふく厳は
其方ぞまき云向ら新ちく

祝云ひすへ[illegible]との事れり[illegible]
め迫るくれ[illegible]ハ俗りのる[illegible]
おもめめのの故かりく情[illegible]
を婦ふ事れ[illegible]故う裏祢[illegible]
祝寿とせてやる私もめの[illegible]
ヤ度と彩色事喜のヤ[illegible]
如く望りそは[illegible]頗(強うなし)おあ[illegible]
ち振袖の着[illegible]ヤ面喜の[illegible]
言ひへおの[illegible]ふまいいか[illegible]
思ひ立五[illegible]の立積とる度[illegible]

ふ成ま何事彼りまる[illegible]ゆふ[illegible]
を如漫の式を也何程繁[illegible]
寄喜かて[illegible]富士あらんや[illegible]
乱心と迫くせり[illegible]
ぱても奥石手事[illegible]
の漫か事り祝れまい喜[illegible]
もふ[illegible]
ハすよ[illegible]
奥祢との[illegible]
移ハ花かふ[illegible]

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の病か更らく痛ましや病のよく〳〵言甲斐も
もアイたわるくはさこそ苦しけれと言葉の
語〳〵いかゞ心か男が持せて呉れし薬と病が更へ
厭が笑いせらく蚊入せ〳〵
物く薬〳〵の病の言甲斐も
の臭のよさ如何と更へ
元の病入れや病り臭ひの
指事が一年病のうち〳〵
持居合病が厄と居ると

叫〳〵く第七の京傳急度叱られ
もなく〳〵廓の是も生れの白粉が違ふとふか
境形油男がらいまと言ふ
くも世の風かふ立ものれりこスワトは通ら成
かいけア更生〳〵まかう記
と更なハ〳〵の却女中かよう
仮り雷まかふくまか
せ〳〵う産一所の
こきくも支かあく
水仮男もはよ成一生女房も持こともいわ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

雲のうちより出しか山よう居とそう君屋ふ雲かふと
思きいさうま形所まいの
百日紅龍せ〜山ふ見しと
かこまん支山幸上列の晴名山よと云いせもれ
呆ちまい其山の主勉よふ満汗権現の布理ふ
依らくた客右客のかる切遠を按ちくまおく
今日幸い云なり二号岡ち屋つくもの朝湖
かおよふ名外北台く神力擁護の故なるふか
只一分の雪と思も慢心生〜ふ北生同志却
〜号岡か住居すふい行事於早くこ行そ家

名ふお演せよ三年の句
如北の雪士世ふ了東ス東
告ふ来い向うふの清ふ
上ふと思へすう雲中ふ
出よ日幸く降朝せん
た風か黒雲ら日幸の言
ふき山上幸号の思ふか
ちう〜念く書ふふ
を西ちん其川ち多姉
り日幸ら神岡三千号

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

八日の地かくせんと唐鴻の号船の中へおし込んで
私領分主の奴原か四方の国の地方漂送まことに言しわい
悩き揺り和睦めうと二十人斗り揃りて小舟一そう
漕寄一首の初より事十八人これりといつとも
初めの初より事の内かまてこそ逆なう事れまい洋の
首云悪く胴か居らんこそ唐へ乃
首私胴か名残のおーも事れーと思ねふく
と聞くまい其の内云悪と化の目迄へ一十八人一度ふ
居らん皆首れーの戸縦斗か御りーかの唐へ
云行か漕ーねお於ん日本神兵の厳りとこんまう

畏りーと唐へ云悦ふーと船か漕ふ初か云悪ーと化
本国ら着く其年中ら武者御乃首取除の中国
二方か御而ーちる長四ら年の春夏ら上へ言へやとりーか
世間の於くるのか安産家康ら石敬討すふ方か是取
か石国方か下めの如上於
中より剣奈山上ら楠家ら事庄篭長朝鮮陣
営せ事度兼ふらふ向か待入ふとやき一故山上ら御
の御後早ふら向か待入ふとやき一故山上ら御
連立下りーかい事庄篭長被露かふ堂勝ら
下上と云ーか山上沿ふ者ふふ者ふ陸ら迄而

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一張へ上杉家の士多かつを迎せて治す抱
たゞかれゝまい薬か一掃ふもの
と云ふか有事ども勿論
右の如うつゝ入国迄のふ係如斯二百石かゝる
嘉七十度京勝石より抱とふ江戸の雪士ともの歌
うてふ面く

一百石　山上道友
一百石　薬ふ京勝
是も加賀の利家へ従来かゝる雪の士再者
御行の十九ケ本八の七年迄日本力量

八人忠量と云ふか有事ども勿論利家一張
七百石ふ争ふ一本の本
十人死向ふ家立ふこれり石
かゝる山伏の如くれり今の兜中を被り
いる七かの強者おかゝ馬ふも金り
兜巾をかぶらせゝ廊ものれり立く
忠量の山城強益上者云ふ事ふとゝく三
十八人長ふ尊常かゝ勝まゝ一まくのまよ二十
人ふ家事ふ常かゝれからも野持ちさ
屋ふ家勝石国迄の報廊従ふこと

中ごろ石谷なる富士
一百石　　三本木
其名高き馬
其生家　　同一の
富士丸　三本木
人間業とは不思議
多野川遠く下る武
揃らせ其内一人八寸
ちらし　ふと驚かす
富士十間四方ばかり
私の乗込んだのを
星巡の家に富士もろく
け度なるほどり
八千石　　国方内
七千石　　厩生家の富士
是も厩生家の精兵
名高き馬
歌川豊国
如力量そろく馬揃の
士国方内と方内の
ふさはしき武国方内厩生家の

九七度の低く暖くの特産にて其一年を通じて気のあふ武士気質にて低く迫斗かく二百八百くの士族の着剣元来藩侯土国の者にて士族の着剣元来藩侯土国の者にて士族の着剣元来藩侯土国の者にて

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志巻之六十二終

日本一統志巻之二十三

目録

一 家康公清洲宮有り三国清和山に墜居す事
一 明利長足利石田が組一引拂ふ事
一 吳利家淀堂を攻る事
一 加藤公宇津景勝退治に向ふ事
一 明於宇津に景勝諸士を攻る事
一 吳藤田能登守宇津公を迎ふ事

日本一統志巻之十三

家康公清左衛門宅へ
事

御利長卿石田に辺
家利家御室ち御
ら御給事

駿ヶ峯の上松叶動云
ト〜と云云初一忽の
勢成とら中切ら座も
清の御給宅之の浪く

入侍寺務遅ニ而悩れと上言の詞報ニ十万
余の勢の内ゟ押寄るとの風説如斯ニ候ニ付京
自然と緊急ニ而ハ家康公御出馬ニ被成候
哉五年二月下旬ゟ四方ニ而ハ伊達ハ出立ニ
ハ出立ニ而
元和元年中ゟ老中奉行の半角のもの共異誠ニ事ハ
人の悪名を不聞ニ意秀頼の伊為ニも不可成
大名中ゟ当度の如くなる志の元中家ニ御出被
ハ当度のゟの上ゟも大坂の出来不可遠ニ於
彼是言ニ而ハ陣参ゟ海ゟ取々度奉行職ゟ辞
退ゟ被居城ニ而和山ゟ城ニ御出大坂の騒
動自然と不止家康ハ参りく言ニ而寝食ゟ忘
又ハ凌ゟ処ニ而ハ当度のゟニ而ハ遅退のなかよく
老上の沙汰も耶未ゟ多分の通家康ハ年遅節
ニゟ処歟ゟふ事味方ハ遠の不同ニ而ハ不叶と心掛ゟ
当元和元年同ニ月一方の橋ニ而ハなりきく一方の
案内方ゟも分別ゟく不申候との御ハし
石田治部ハ使ハ返言のなき早速ゟ
矢ハゟ生きニ而ハ死ニいゟ心得ニ而ハ鳴方退
ハ上ハ何ニ而ハ吉ハ半ゟ

ちゝ語をなす言のまゝ教育なる遠く近郷富の
馬くる内府公の如きとおもひ近くおもひ
家くの屋富かゝる興儀の憂もて玉ふ
大歌をもて堂もせ言もて郷乙の心御自ま練とるま
世間とゝ知らぬ石討路の傳ふて孫成〳〵早く
家康の仰せ付和山石門籠世間の侍ゆゝ近
て玉ふ〳〵其上言葉の有ゆゝ佐ゝ近日京勝の連言ゝ奏と
風吹いふ〳〵ゝ汇沢のち得軍ハ家康自ゆふ
下ゝ向〳〵早意其ゆゝ佐和山ゝ出陣ゝ
語くゆふ人事何ゝ祝もゝ〳〵と言ゝる侍ゝ

三成言ゝ近言の通ゝ佐和山ゝ
事ゝ〳〵係ゝ何世上の風吹ゝ
下討取れゝ〳〵ゆゝ玉ふゝ
寺早速ゝ玉ふ清ゝ
事ゝり扣ゝ於智ゝ元ゝ言
を探ふゝ佐和山ゝ門近言の通ゝ
ゝ言家康ゝ
のゝ動ゝ〳〵其ゝ
を計せゝ〳〵家康ゝ陣押ゝ
の沙ゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

ども才の秀たるかと思ひつるまゝ私はらをたゝ
けつゝ其ゆくゝ先々神の伴かとも思まいふ仕ゝる
早くよりきゝ始とうけしゝとも
多くの事も一親のおとゝ
聞つゝは吾大きをとり宮と孝こゝろ
も忘ずの余稽古のない
義の四ツ也ずかも一つかもおもちか後ゝ者ゝ
油断ふることゝ
よりは石田方にもきゝふ安房守力ハ秀康つかい
先ゝは供せゝゝゝ其ゝ石田方とまて

ゆきとゝ
十間ほど入ゝ処同ゝの松ふい文ゝ汚芸奉行職許
退も休和山居のゆもとな処ゝの別座迷惑を
大名中遠中ゝ了覚かの書ゝ是又むの事かゝ
ゆゝ家康を遠ゝ入ゝ
掌お秀康ゝ了ゝきゝゝ秀頼のおとなりんかい秀
康又宮のおゝ止まいゝ芸極楼勿論ゝ是又遠事
の用心ゝゝゝ秀康をみるえゝ之了ゝ大名
の面ゝも宮の為ゝ家康ゝ家ゝ同時ふ
計ゝゝゝゝ事ゝ秀頼為ふ

御長の子世上お稱ふ右和泉の妹
故如斯ふんぬいもの事こゝろ〳〵いゝ石田も家康
も油ふ順ふふ合の案れまゝ考案のふ治城傚近
下ふふ話とのち度兼而ふ〳〵おき和近ふ葉世間ふ下
思ふもならひ十よ早く傚下仕ふく長束
増田両人の同役ふ五奉行の一磯ふ辞退一字ふ
ふ中納言秀家の亭〳〵ふ籠りふふ十六日の
大名共家康ふ思ふ集ふ内府ふらぬ京
着く共ふ合ふも不下ふ重押掛ふく石田ふ下ニ奥
立一ふ思ふくふ以邸志故佐竹右京亮義宣ふ

宇喜多屋敷ふら〳〵三斗ふ財面一昇宛ふふ
ふ思ふくふ処ふ遅同ふふ宿ふ宛ふ〳〵十六日ふ大名共ふ集ふ
人数三百人も下ふ〳〵おまふ斗ふらも押掛ふく来ふら
宇喜多屋敷と当座の扶持ふく利運ふ付ふまふ徒
退下ふふ夫迄の道中ふ集家守ふ退ふ一面
扶一万ふ下ふふ遠中ふまゝ有下ふふえ
かふふ思のふふ秀頼の印所のふもいか〳〵
下ふふ斗ふ石田も佐竹ふ思ふ石帯ふ
ふふ如ふふ扶斗と法一かいふ
ふふ如ふふふ扶斗ふ治有鳴ふり守ふふ
ふふ十吉佐竹の家事ふ一倫部千家ふ中ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

処三百姫路台守ら退し仲も早く立退
んとの故ありて国の大名中かも一二の家ら家存会
是なく、こと掛しい何国も此通なりし
軍のん掛かく仲也退く者何
仲違一中亀ハ討死ら
なの急むかしく何会兵ら石田ら
なのまいこと聖ら奉りの残寿退一動無ら
一く休和ら居ことらく事一第止ら千万ふ
守れり是ら何ぬ退姫ら
仲ら弱化を手筆官士の二百処外
中ら国迄も名ら器一ら
変安くものをそく波ら
お待ことらしかく十ら人の中ら福嶋大満実ら
遅ら出らく中亀ハ仲ら
内方ら仲しらか下ら
おことら亀ハ急らハ海ら
め会士ら満一化仲の居ふ
仕るまことら仲ら
おことら仲ら報の処仲ら

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ふと紙のなかに名のしるしある
る内府名代かと輝政とも
一十五人の衣中かも内府
ら一かと早速家康公
せん十五人のお名中かも
重んじの一札かり御印
こそく出座は被仰付
明日かも石田なく帯仕
らく名子筒井定次
ほう下知ある一通仕
被仰付候
十六人

如件

慶長五年二月

内府公

又家康公かは度々名石田治部
被差おこし早速百一許ふ
第下為勝負勿論なくり
事勿論ことの輝政重政
故名大名并侍迄拵
き云迄も三成もおは遠しくい難重
罰おかせんかと思ひ雑止のよう

帰りしとやらく三かをもらい是ふも生
く結城城は帰れ此内い某も休和山の城石ハふて入
ぞ墓かお生せ酒毒かもし
時与申上差か秀二原ゆ信れりけ彦の家原ゑ
ゆ越切ゑ松のゆ煙硝の処ゑ津ゆ下向の海かく
おく生ゆ歌共ないもし生なし故ゑ名中一入石国か
ゑ面ぞ思信ゑ内府ゑ石思ゆ自奉りし生ゆ容
帝よりゆ賢ぞかの計一ゑ石のとく御ゆ
ぞや
かくゑ文長五年閏二月二石の朝加賀越中の国主

追二位権ち納言家康利家
けくゑ石国ぞ男道の契りゑ石申
か又二人ゑれ秀吉ゑ石思ゑ
二男かゑ子下のゑ小名ゑ家原ゑ
ゑ生りし廉也の生探のく
ゑ石国の御仰ぞ意ゆ
かゑ切かゑ改生ゑ文秀頼の御名運と
云又家原ゑかゑ江戸運と
指ゑ追四位宰相ゑ利長と
ゑ小名の元中利長ゑ悔か

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

いはゝ若し年代から言ふと文利家の薨去も元禄かと思ふくはお活百三日七回の忌中なればしかるに一説に故太祖公驟動しふる細川家康公一家東照宮の如く内府家康の病ひを嫡男秀忠卿に譲り家康の如く秀頼の後見に成る事加藤両国を八二男孫四郎に遣はるゝ如く返の時列

八勿論加藤三列の大守と雖も利家の如く五大老小遣ひ秀頼の守立ふ一方の仕遣ひなれば元より両国は足下の元をい諸方名の方右の上座には一段と成り神文前書も一通ふ故上方より文利家々家康公の仰も諸侯一通ふ孫四郎も実録也一説に秀頼公実録也一方の故文利家々の孫馬の二百三日朝日足利長ず元服事ふ早ふ上京ふ故ふ父亜お仰高家の如く諸

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

父の御病ありまいらせ候の上これまいり候かはやく〳〵御国元の御ために候ほどに御中間どもをつかはし早く御国元へ御下向あるべく候七月朔日に御着せ候ハゝ七月朔日に御着せ候ハゝ御国元にて御祝儀の御吉事ありまいらせ候ハゝ御祝儀の御吉事ありまいらせ候ハゝ御祝儀の御吉事ありまいらせ候ハゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

性から云ふ上百石より大祿おいとり官位も従二位大
納言か進ミの方へ昔形のごとく進ミ中
より石仕のごとくにきゝ城持の家老へ
士分の利家々々同巳の分の家来ら云ふ時城中に
て酒宴の会ハ大度の軍の
のごとく祝言宴席へ利家ハ狩
衣ごとく熨斗目ハ麻上下ハ素袍
らきゝかゝ後室のはゝ御
利家へハ一代形重のごとく弱まてゝと安なゝかゝ
祝れふ〳〵扨も大機の奥
室ハ方かけ云ふ上ゝくゝ
室ハ〳〵ケ様の事ハ士大将お勢ら友
ゝまくおも近者もゝ〳〵後室
駒まてゝ其奥をふ和くゝ
和行高ゝ國州の士分ゝ古ゝ
きぬ斗か雪進んで出ゝりくゝ
後室言寿宴席ゝ後室澤
を掛けせ利家々々なゝの
如武ニ男のおとく御前ゝ
ゝ藤原出ゝ守何きもお酒〳〵
ハ簾ちの中上ゝきゝ利
遠ふごと名ハ〳〵平伏〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

かく對面すれば其言違ふ事なく
御ふく五奉行共の下知
中加賀侍従御中の三
奉行常の不同男のごとく
ものゝ武士のみ一人として
おいてかつて秀頼のかたを
ゆるす詞なく一度仰れうけ
設違りたる詞ものゝ徳川家康公
かゝることなくいまだ秀頼は
清洲侯ごとく三奉行
かも書らぬ人なき思ひ
智恵のふかき事も思ひ
早竟五奉行元ゝ
こゝは
卯学おく
年も立ゝ
こくゝ教ゝ
名元ゝ
しゝ
こゝ

行清明
奉行
立ゝ
退座ゝ家康公
ゝ
ゝ
ゝ

のれ〳〵前田家の軍と知ふう共和止仕ふ事ハ
なり〳〵ハ利長殿四ら手元かしくたゞ
方ら御〳〵ハも死ぬふ覚悟ハ
ら様ニ元計ハ前田家か手ゆよ百ゞと思ふそまお
実のた悟ハもち〳〵ハまくかも内府家康ら軍ハ
引果〳〵當国ら御入なふ時ちよつ〳〵ニ軍〳〵
ふ叶時ら浩隊ハ利長か知らせくハ百ゞ有そ
ち屋か〳〵降ニ来すふ和談越前の三ヶ国ヲ
国又ハ国ら一部二部ら共ニも今ヲ而ふ共ふ
ハ言ハ云ふよふろふさ

ふらぬおそれふかしや利家公ハ
勅様の御所の上又ハ我ら
ゞ家康公ら勅なふこ〳〵ハ
御ふ有らせなそのふそ
をいふ戸中納言と同様ふ
ふ兄様ふまれ悪言と云
様〳〵ふ云ハくい〳〵ふ云ハ
愛利長退治と早領ハ
ふなハ是非一方と用ハふ
い御様もれ御ふ云ハと

幸く坐く知ろし召す君ら諸人等の為ら
以ち言ものよなす世利長き家底ゑ以ち明もれく
大切ゆゐ引立〜給ふ御恩の深き事を
義ゐのらい利長ら百かヤよ〜ゐ利家ま功の深き事ゐ
忘ゑ天ら地ゐ有ん遠かと深く
立かーくヤちい家底ゑ初ゐ日を下ら
入支かりこなやヤし方から遠てよふ事ゐ
何このそふふ深ゑ心のかゐ有如かかる
智恵の深ゐーちよ軍のてる日天の時と地の利
とくの和ゐヤしこゐゐ以ゐ日を合ゐ勝事ゐ一かーく

夏ふ事ゐ忘ゐれりと利家ら
ふ若かーく小國かく旗ゐ揚ふ天の時ゐ云ゐ天下
を引治給んかゐ一年の内かくいろ以ゐ天の時
ゐふーく十月ゑ二日遠ゐ雪深くーくく馬の
通路ふ自由ゐれり寒ゑも他國ふ十双倍地の利も
又雪積ふ所ゐ常の季地も深ゑ迄ゑ常の勝
ゐ道絶ふゑ月かハ雪ゐ消ゑ遂ゑ季ゑかゐ他國より
責入ふゐんふ易く防ふ力れーく人の和も実
処ゐ大勢ゐ老ゐ幸行中ゐ
ゑ日味ゑと思ゐい明ゐ

當か何この勢ひをもつて軍を進かりても利衆
ひなる命をはしまいまちい撫ふせかい御ふるまわか
いかか利長卿の西宮かいかいかいか

南方の夷ふるく官ら一和し上言への早おかた
渡まかまと海る義するあり此の度
よふく並くの事かく内府公の叡心
十四ヶ条の人望とーくよこ言に聞果ら御公
出すへーこ支利家への国ら報その大うとめ前田カ
着例四百三千騎余の官ら報加賀越三ヶ国の民
百姓の情からハ天も恐候そふへーこ家康ら
策ーをふへーこ早おをこふくけ候御門跡寺守
言へらまこ官御ら又人病ら言ーこ意欣の
例寝官ら慶ーこ内府公ら海ーこ早く人質

ニーくこ如前ら下ふこそふーこ時言春倪ら
らハ言くは思ら官らハ秀ーこ利家への人質こけ度カ
人質ら家康松ら平ーこおを利家への海ら
前田ら通か宮ーくこ急い利ふ名生か海ら
まのこくこ家康ら松ふこ利長ら江戸中納言
秀忠四ふ四ふこの事ら言春倪ハ江
戸こやらんへ江中納言ら海ら居ふーこ上
方ハハやふ海ーこ其ら后家親ふほこそふーこ処
又早おふくふ其後中上ーこ処家康ら海おせ
ふこ言ふーこ言ふ海官ら兼く

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

家康も大将あまた加勢の事か一入極楽
滅々好秀元も亦志世於いては今日
事切りさしよと帝国家の安危を利長
もあまたこれ了能為
其外かうしあなどる
なるい利家の
一言の大将をとらんとう
好宗吉加賀国人数
そ月おかいはもの
の基と安く早

利長の告来強而示と雖一途か思ひ込秀頼の
為ところ国言か成ものしかし利長か心立腹しかふ
帝国又ハ宗室ハ家老と高山南坊油山五奉行の
お後のく利長か陳メ
示なは好宗吉をふしかし一定ハ肉府公の為ハ三油兼備り
二ツか旨き争ふそ
大将ハ思ひ込ハ会運の毎度戦ハ
勝ち一度負か時ハ天下の人震動ハ如く
秀頼ハ為か若ふ右国ハまい百一大罰被蒙り
服ハ強ち右国言勝ち家康滅亡ハ知ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

時ニ孫四郎殿ノ言ハク南田ノ家ハオ後ナラハ利長ノ方ノ家ヲオ遣ハシ又利長家康方ハ孫四郎殿ノ言葉ト云ヒ孫四郎殿ノ方ニ利長ノ方ノ家ヲ引入ルヽモ家ノ為メカヨシ家康オ後ナル故ト

おもおもと家康自殿ヲ後家康ニ肥前守利長ニハ二女ヲ娶ス南殿ノ静謐全ク利長ノ尽力ニ依ル家康ヨリ利長ニ慶長ノ末ニ孫四郎殿ヲ生産ノ利長ノ手ヲ抱キ孫四郎殿ヲ家康ニ預ケ置ク家康ハ前ノ如ク取扱ヒ武功ヲ励マシ慶長ノ末ニ肥前守ニ叙ス

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

かい帝国家話ちなる事云語か雑延喜度利長の
度のたる院が堂つ美みるく雑や国内も海に利長
つか院り加賀雑三列が一名とてく大守と成く當
代一男の大名かーらまるふ事偏か言壽度法参
明か都ーく

内府ち事康意勝退治ち御定ら事

旧雑事康景勝清吉なる意ト成す事

矢田雑守事を立退事

然いる長五年五月まか雑上言御定通く小国
雑盗の上ち事康ち於てちかとち坂城中

ゆく離ら雑御定上杉家の動言か家成ふ上ち事
江戸の浪人言ち集若ち十万か雑ふ中上言の御お
翁ま安ーかい雑ちく了向と云者れーいち家
康ち思ちく京代ち雨ちふら定ー処ふち坂
表か乗秀頼の御お後の御使
来ち蔵お捕而くち雑ーち雑御ち御勢而
御ーち家かと頼ーかいら処い事ち下ふ
交ちく之雨国表揮とし加賀清ふ泥ち国石
立帰り守ち成ち度かい御帝国石下国富静
盗の格かち利雑元い五ち坂下処ら奉行中が始と

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一七組の兵頭ヶ馬上りの
秀頼公守護しつゝおも
家康下向掛るについ加賀
向ひ景勝を退治せしむ
与板の城を退治せしむ
長束両人を置き兼和
うふ沙汰又ハ申乱せ
堂ハ言ふ居よりくる
勢ふ宇津下向ふ堀国長来から
ハり一お与家康ニ於
中書榊原康政申
為ふ宇津のおよ
北方ハ宇津下ふ
千余中上ふ
田与ふ
旦りから立お
家康ニ知ふ
家康ふ
ハゝ

一度も二度も勝軍の報知
如くあかまつて
沼田の向ひ披露
布下仕
か書仕
最早恙
まゝ
下恐
まゝ
ます

右のらい病又蜂起せん事是乱世の像の如
し然ハ此ごろ家康う卿の上いちじの中かろふ一ツ
歟のごとし十二ヶ家の大名ども
楫取りう大事ハり乱世の風俗也又のるふ兵誠
を生ひ一族の中かも梅ろる所中の宝神ふ等し
きハ古くのく情ろ口ぜ明口ぜい若り場一吾
儕考ふるふい京勝退治のち将ごく家康ハ
りんと計ふて波おう為かいちハのふ不吉かし
ろ家康う卿か有りろい軍運のち吉事ぜとふへし
実東ちうく七ヶ国ハ領ろ有ごう江戸の居城かう竜

りくち一当ろく事きふれし一ヶ方住居の時ハ
東西南北ハろ之秩序かハ四ヶ国教一の格ぬかて
速ぎ心家康ふ促せよ早くち坂ろ城一帰
実向ぜ台の軍法定すべし一当ろく二日十吉
の朝仲世ハ立のふろく大坂西のたふ入らせふき型
十二ヶ日京勝退治の軍法定てるぜろく船一かい
生ち坂の元中心ふ及中京仲世かう居ぜ松ちハ
名の軍帝ハ北おろ向かしろく坂ハ城西のたへ
おろ結ろふ一当かし

山屋中将行達ち勝ち史政宗　裏判

常上侍従出羽守義光　山形城主五十万石
春日山侍従堀右近将監秀治　越後春日山城主
常陸中将佐竹源義宣　常陸一ヶ国八十万石
同水戸侍従右京亮　義公
吉田侍従池田三左衛門輝政
佐野右京亮幸長　三万　吉田城主十五万石
福嶋右近将監清洲侍従ニ列　尾州清洲　五十万石
細川越中守忠興　丹後十七万石
黒田甲斐守長政　豊後中津十二万石
加藤主計頭守清ニ　熊本　四十五万石

友堂休庵守高　ニ列　宇土　十万石
加藤右馬允嘉明　伊豫守　和鳥十二万石
蜂須賀阿波守至鎮　ニ列　十二万石
山内対馬守一豊　ニ列　高尾　五万石
寺沢志摩守広高　ニ列　撫川　二万石
筒井伊賀守　ニ列　唐津　八万石
福田右近将監　ニ列　津八万石

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

是等ハ宗徒のもの持ち〳〵ニて両の名ハ廣岡あり
〳〵ニもあり佐家ニ庵ニ
岡白ニ仕出ニハ退有ニて
奥羽両国執行のもの名
ときハ豫メて加軍家
ニふ名ニて退有ニて
国のもの名ハ一和ニ列
その内出ニ事侍処
ニて五月五日ニ
ニて入軍律ニ一和ニ
山口と加和二扇のもけ和
（六月ヨリ改ム）

姫古遍屏秀治ニ家老姫島和重政ニ
出中ニふ内ニ言の如く家康東軍一の総和ニ
ニもの事の場ニハ
ニて家康ニ
ニ加和ニ事ニ中ニ
ニ集り加和ニ云ニ敵味方
ニふもの武士も
ニ一の場ニハ加和ニ
加和ニ云ニ
敵方ニ
斗雲士ニ

也仁山城守三十五万石 紀州掛ケ二百四五千の人数
かく出ねをも文ハ京勝かも右の内か君陣ニ東西
南北を下知ニ筆硯も云忘中承候る
幸ホかゆ掛ハ法用捨下ゆく候法律ハ下
文と中上ふけ云たハ名の元中頼を名ふ宣和
ハ宇津宮の軍勢ハ生くハ勉強ニ肩痛を着
く酒皇たくハ家康公ゆ語ゝ故生ゝ幸くと気せ
多ハたハ兼而の通り列ハたのミまきハれ
京勝方か奉ゆの雲城数多勢群集せ
ハかと云元思ハニ候ハちてめふお遠京勝勢も

まニ幸汁ゆの指五幸ゝ
のくるれり列ゆ智ふてすれニたあまハ他の勢ハ骨
打すふかも及るまゝ家康七ヶ国の兵勢ハ込ゝ退
治せん事ハ易ニ係近国の元中用ハゆく姫国ゝ
を二ヶ守ゝ家康ゆ津奏ニ下向ニ京勝とる
宮ハ迎打ゆら筆着ゆニニこゆく法候ゝ
元中ハ

最上出羽守義光
姫左衛門督清正
村上周防守義明

伊達右馬之助政宗
蒲生飛騨守宣勝
姫 美作守親忠

居城ミミ印

定かの元中より下國一早
吉祖かこゝ長九年三月十三日より
權大僧都陳伝ホ三国志かおの
御門堂かたゝく追善叮嚀かゝ
一石の板写の法すおゝ上杉清代の士大将城持
人教持名焼香浄禮おゝし
ロ写かなこの御定不義理成法
下法こる事祀ふかゝ掛ゝ面く
之の面く江戸宅下生ゝ
京勝國義をこなゝ陳伝法
子供か御地かロノ名の小四半の藤原氏ゝ
八音ゝ度上洛の事なゝ迷惑
ゝも一りなゝ法ゝ国ゝなゝ
旧領の神なゝ新領の事康ゝ国
ゝ国化界の御ゝ早速ゝ上洛廟ゝせ
伊勢ゝ上下ゝ事年三月ゝ上洛すゝ
吉年中ゝ家康ゝ始大善ゝ
ゝく体息ゝ国の内ゝ上洛
をゝ急せふこいつとも押ゝく上洛ゝゝゝす事再
三の御座ゝ考ゝハ口年吉祖家の通ゝ平功治の

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

近日ニ至リ沽ル歟沽歟ル死ニお軍仕出而
沽ル事ハ不レ知ハ十度の合戦ハ一入仁富ニ死花の咲と中
かゝ枝のこと句のことく幸庵ニ至ふるてゝと武ふ振て
中ニ立ス安ふ安心の城主幸庵敵味方ニ知ル事ハ
遠を文ゝおかゝ居ゝ国主居の事ハ
ゆゝ筆まかいと記ゝ夫ゝ
雑持場ニ梗の支波走ニ主従共五人病中なから
ゝ持ゝかゝ口沽事おゝ
昆布の堂ニ而沽ル焼ル事ハ
まハ京勝々の宿ゝ名中よふ
ゝ居ゝふ処ニ幸林内癈ル
「忌ル掛ゝゝ」ゝ
掛ゝゝ言と云筆長ニ走ゝ何事の忌ゝ
言まい事ハ死ニも忌ル掛ふ士ゝ将の乃ゝ墨ゝ
棒ル掛ると言ふいふ吉千方幸ゝ
東禅ゝ方馬ゝ汚ゝ料の
のゝ乃ゝ帰ゝ
おゝお掛ふ枝ゝ
枯ゝゝも

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

[illegible]ろ文度せよと幸右ヘ入のまゝ処いたく胴筋
きちふ内ハ宇津地下の方石小路ふ居をふ雷同形部
ニ千石の例よりおく備信ハ弟配ハ兄の士方将のう方
おく起掛くる五百くの小侍の引立ハ雷同形部
いかなふ為ふ急をハやく書ふ有度八十三くハ引ふ号鉄
炮十挺奥ふ白押立京橋口ハもはり引ハ宇ハ立退
立ふり宇津上方口の於ハ雷同ハ病中ハまハ法用ふり
ふく止めんとせハ幸右ハ五くおく揃ふ負三十人
かふハ雷同も為ふの河内十くふ負も二十くハ斗
ふりハ注意切掛ふ立退ハ姫の明神迄退ハ去ハる

和一里物越ハ引ハ法引ハ鉄砲ハ内ふの
為引ハ雷同敵一足も早く為度ハ法用ふ
はゝ退ハ去ハぬまハ那波七騎ハ元雷同ふく送ふ者
小中台亜ハ処雷同法用ふる立退ハなゝ京橋立股
ふく吾ハ明石ハ中安ハ方後の方ハおハ押止
はんなハ時ふの武功ふる軍ふ
法用料ハ吉ハ馬ハも引せんとなふ処京橋ハ脈を
不ふ張まふく逃ふ奴ハを足痩ハ者の為ハ共
通引同迹の士ハおふく立退ふハとふし
ハ雷同ふ退ハ一疾遠ハ

白川城も早打二騎来ふれ
をふるく知らせしかば白川城内の仕事のお供かと思
ひの騎馬歩行立七十人斗
まりしが白川城下の寺門御屋敷いまだ軍勢の
ふ得といへども和則七ふ兵馬田取部より
口論の開淨しく立退う又上杉家の大軍ゆく見て
立退うの組は尋ふく国メよ者共ならくと退取
巻き手門が士共声くか流石上杉家の軍度共ふく
士う逃退る様子も甚くやかましく城主寺門殿
争津表が立得ふ退好ま甚く通す中流一城下は

く救を入体息あまこと答メしかしかしか

今ヒ此罪悪ノ末ノ予ノ如キ十九ヒ年ノ夏ヨリ十八回国ヲ渡リ一処ニ朝鮮陣ニ渡リ下リ一ヵ上杉ヲ名古屋迄ノ海ヲ渡リ又羽ヲ返ス一今ヒ此罪ヲ籠リ生ヒ年師ノ歌ヲ詠ン与頼ノ力量ノ立頼セ一ハ今ヒ此罪亮山ニ常山城ノ如ク千日充余籠ノ如ク中上一故ニ禮ヲ禮ヲ姫羅ヲ通ヒ年天下一統ノ治ヲ知ラレ又ハ家早一ヒ年キリノ上杉家ヲ出ル一ニ常ヒ一小清盛ヲ通セ一ハ吉ヒ年ハ京勝ノ呼ヲ待ク常ヒ年ハ遍京勝迄ヲ上方ヲ知ラ安座又急止一ニ常ヒ一

急急ノ力痛ク常ヒ出一ハ年来諸侯ヲ情深ク慷慨ノ流ヲ長五ヒ年五月下旬ヲ三月十六日ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ遠迄ハ不ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ奥下野ノ梶ノ神迄ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ表草籠ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ上杉ノ同士軍ヲ途中ノ御倫ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ安ヒ年ハ軍田形部ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ両方ヒ声ヲ掛ク格ヲ名ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ芋川ヲ家来ヲ是ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ上杉家ノ迄ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ下ヲ常ヒ一ハ一ニ常ヒ一ハ両方ヒ方ヒ急ク二百里

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

通紀如此上杉のうちなる直江兼続ら
巳氏異の士卒ら招き集めて掛らなたの足かる
かるく踊り上らるおしかけの浄はお袈裟御前
おもむき乱れ入る雷田是迄ともおくく掛ふぬっと入て
行く払ふ百らく投掛二浦三浦小浦教一首ら宇津右
ち産れりともめくく抱きり宇津かみりく京勝く
右の脇上ろくの目之上杉あの赤恠主再度ともら
軍の旨速目出度ともく名進ら雷なり雷田ら雷六千
石ら雷方恩右ら下集る雷士ハ不知真ヲ幸書ふと

方勢ら浄掛らく一人も不生ともく京勝八千人絶唯ら
鏡の上石ハ綾かし神水ハ言らく乱世変一撰代ノ
起ら者例新ら末芸七百三千八百人悪くら之悪ら定め
日本ハ引史らく討死ら者ら数ら晴合戦と号ら
握らく浄掛ヶしハ治しありふ雷ら訪れり

日本一統志巻六十三終

特3
1

鳴巣村
幸田氏
藏書之記

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』請求記号 862-160

ガラス使用